



類 門三第

號 架 函 冊

八 一 二

一 七 一

館書圖江松

317
33



木
氏
番

有海序

其れのを淡くしそくは静に流るるを源とす
 朽くもえん乃約れも徳志のくくして瀬橋の色みあそく
 とそくもえんよくも風雅のそり着を合せく向上れ別を
 越えもあそくも物れもはくくし行りあそく是等ハこれ
 文更友士れよあしてたまそく市塵を離るる候なり
 平生身と風をふ吹ちくく心も大虚ふくめあそくハ
 眼もたそく江のそくもあそくくしては先毎の風物と向ん
 きもあそくもやほやの落しきゆき果くも風情いそくハ
 其は瀬瀬橋のそくもあそくく人やそれハ芭蕉庵のそく
 年々くく貴族のそくもあそくくめあそくくハ其のそくハ
 徳あそくもあそくくく小病床の候と無くく年ハ

印

有取海

あまのまに

早稲の香や分入こまハ有る海

芭蕉

け白きえ縁二は奥のけけ
まを送り秋風とけけ
らよのけけのけけ
なうふ菊のけけ

芭蕉の由田園のけけ
船をけけとまけけ

ア二

又船の香や有るめうけけ
又船の香や有るのけけ
又船の香や有るのけけ
又船の香や有るのけけ

浪化
曲翠
支考

芭蕉のけけ
海にけけ

先入や山家のけけ
け人や田のけけ
田隣へ早稲のけけ
又船や人のけけ

惟然
之道
正秀
去来

花のうらや又端つゝこゝろ毎の始
刈入てうらやあれりりりりりり
あふなるは端のほや秋露入
又端のほは刈をこゝろこゝろ小村武
山水やまゝと神秋の香薫散

子中 呂凡
日 嵐音
日 其繼
日 林江
白空

病中

秋の蠅うらやこゝろはこゝろは
すうらや西瓜切く種めうらや
七のや妹とこゝろこゝろこゝろ
はこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
取こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ

カ 秋之坊
イカ 陽和
芭蕉
去来
文章

ア
三

花のうらや又端つゝこゝろ毎の始
刈入てうらやあれりりりりりり
あふなるは端のほや秋露入
又端のほは刈をこゝろこゝろこゝろ小村武
山水やまゝと神秋の香薫散

カ 芭蕉
イカ 陽和
去来
文章

病中

花のうらや又端つゝこゝろ毎の始
刈入てうらやあれりりりりりり
あふなるは端のほや秋露入
又端のほは刈をこゝろこゝろこゝろ小村武
山水やまゝと神秋の香薫散

イカ 芭蕉
セ 蟬嵐
ミ 刈泉
サカ 野明

糸のほめおとらお 採取 曲琴
 錦水 錦水
 嵐音 大坂
 伽香 サカ農
 昌房 セ、
 秋風 檜中
 平交 イカ
 土芳 イカ
 野童 イカ
 尾頭 イカ
 野明 イカ

ア四

花蔭たけとのひ切あまきのぬ 河

あねらうら人の涙さよ

あねらうら

あまのまをまよありけ十又字 イカ 車来

比丘定 かまらうられあまのすけの

あまのまをまよ

あまのまをまよ

妖のまを舞まよ ヒ 百里女
 花の中まよ 胡故
 鶴の尾まよ 荆口

芭蕉の巻のりす

ままたつ春の月とてやちり柳
初よりや比良て遊つく帆倉舟
ゆりりの友れつくさや奥乃棚
とりうこれ曝しや一秋乃あま
木啄の入まりり夕架やぬの雲
日當よせつらりなすすうつて式
るまよあゝまゝれてたさうつ
粟の穂れひくに入らうつて六
世新もなすてとちぬあうし一
まろくふちりりわうしあし一

桃隣
木節
惟然
平水
丈艸
正秀
卧高
惟然
正秀
惟然

ア
五

左宰府と通アからぬ女もの
おほく集りて揃こまらう中よ
やまゝ一を家

一取このやうしてねせぬうし式

七
卯

うし

うまご人の油引やうるやうし一

は
人

まららの燕二白
本辻は直うて

ひをれこのましくはちう小麻うれ
管の穴を修くはつるや一麻のたのま
啼くわけて南さうし一麻のあり
ひさうんやうつらう麻よみあ系式

其角
探志
丈艸
半銭

あんせらにほはるるゆれ小集うぬ 彦根 汶村

西塔の宿して二句

明星や尾よはほふ志りのささ 曲
いよぬひさし川しちまよや麻れま 蘇葉

秋日遊小倉山 同詠鹿角

振あけてる多よらや麻れ角 野明
諸角に月いりまきこ出麻れ 来儿
麻れりや角うまひけく志のひ 荒荏
たきあふ角ふてなりや女麻の 困夕
鹿麻の角ふらそすまよア角 為石

ア
六

外まこや小サ秋よらや麻の角 去来
あつさとも志のまつけこ麻乃 遊刀
禪つの後よこし 麻乃 大坂
出あふや麻の四つれさん 尾
露川

なう月の末大井川也

いつらに稲をすはけ瀬や大井川 其角
粒のこのいよやる 咲稲うぬ 支考
稲村れち穂とらんちぢらすめ 孤屋
稲いり夕もきりりやいも 史邦
門 史邦
嵐若木もさし 智月
なま 智月

粟米細此奥まゝありまゝに入目これ
昔情くぬるをりりそこの花
狐火のししけくさやそこのま
口取も嘆きまゝと 弱むよく
京うさハ昔約費のをもとらなり
一番よかゝしこころを分た
このむししれまゝししを分た
日より能なることよふの野分た
とまのまゝにふりてまゝに
風の根をとり能ふりり能のま
電の切まゝに 残るゝ三日れ目
待宵や流浪のうこれ亦乃ま

イセ 空芽
セ、 雨汀
荒雀
曲製
浪化
許六
向空
小松 浪化
塵生
卯七
文鳥
惟然

伊賀山中ありて

急月や花うしろんて終もま
明月は梅麻のまろりや田れろり
あふもつこてまろり月めま
急月やあふもあゝろりま
めつけつやまろりトルせまの橋
急月やいろりあまゝれくま
明月やあふもあゝろりま
目てろりあまゝれけもなき月ん
娘な肉とまろりあまゝ月ん
急月やあまゝ女のまろり
明月や里れまゝのまろり

芭蕉
全
大草
江 太
彦 如
正 于
野 青
茨 山
利 牛
木 節
大 木 枝

子破の定小彦く

月削しつらふおちる月見えぬ
明月や向くの橋やてらるる
明月やあまの介此坪乃らら
飼養子峰おとせ乃月えく乳
明月や片よよ女しとたの坊
名月よもてて流ておれうらた
仕意きく傍よハ孫の月見えぬ
明月やよもりく 船乃家客
月影小くハ鯉禰う小橋畔哉
豆腐やつとつと月七ツ物
おろくしとむくハお乃由光る

如行
去来
野馬
残香
龙柳
野童
山蜂
浪化
新田半村
官城氏
名丹
牡年
智月

ア
ハ

やけむし一子橋のつらふ南草く

正秀うたまうりまのたぬつ
溜りもれく松引よせせ
梅よりやあつと
あつとあつと

野草

青れるあつとつらふ

野高

あつと

あつとあつとつらふ
本橋よもれうあつとあつと
あつとあつとつらふ
生葉もあつとつらふ
あつとあつとつらふ

正秀
風琴
文草
子川
岱水

秋ももやうくくるとちうに花いなき
 すいむの雪にひらひらふくさ
 とくしんさうも海はあゆり縁
 燈明は虫もあゆみあゆみの山
 をくけしつゝ宛おもなうすまきりさ
 葉富の二つもさひやあさこのる
 葉れ書ふなくや山家の古上戸
 黄も縁の字さひかゝる葉の家
 梳くれくぬるあやうくは花
 葉の花さるもあゆみあゆみ
 蒼浪よのくくくくくくくくく
 九月の氣さくくくくくくく
 待彼

カ 風国
カ 飛故
セ 兎銃
 獲葉
 文州
 李由
 北堂
 支考
 李由
京 可憐
 嵐雲
セ 待彼

松茸やぬことおろし〜
 為有

あゝおむさうひ〜
 八森
 斜嶺
 卧高

月あま〜
 月あま〜

秋の夕一日の夕れ——とみちる谷 長サ 田上尼

のる——

穀十里ハヤミの燃り 今 魯町

濃霧や金ぬき 呂 呂風

空の中にやぬき 呂 呂國

の霧をきる 牡 牡年

新秋をぬき 史 史邦

冬

古郎よさひ枝あり初——くれ 荆 荆口

いさうひの根もなき市 正 正秀

字 曲 曲翠

伝 之 之道

塔 如 如行

や 丈 丈艸

目 李 李由

半 浪 浪化

志 去 去来

ア

婦のくさくさふなりくさくさ 野高
芋のわりの男のやうぬむく 風國
門火たたくたのふやむれく 雨夕
秋の持とくさくさ 平水
五葉のくさくさ 露川

芭蕉翁の七日くさくさ

あゝれさたせき名ゆは偶若

してさくさくさくさくさ

くさくさくさくさ

胡のや茶湯のほ乃くさくさ 文州

くさくさ

鈴のや八参つんで墓まの紫 去来

るの息はあふふふくさくさ 民丁
くさくさくさくさくさくさ 素龍
くさくさくさくさくさくさ 春舟
雑水のくさくさくさくさ 紅朝
け里流牛のくさくさくさ 木枝
くさくさくさくさくさくさ 夕非
くさくさくさくさくさくさ 林紅
木枯乃文りくさくさ 其繼
芭蕉翁の送葬はあふふふん
くさくさくさくさくさくさ
くさくさくさくさくさくさ 野明
風や田より田あかくあれ 木導

こころ〜や明早めれて三保の松 空芽
 春も〜木の葉はあれは社家の庭 八桑
 ぬきちるやひの木の葉あはる角〜 氷固
 昔よあつてあつてこれな縁の〜 野明
 あ〜小猿のつ〜川粟のい〜 野明
野明 小五良
 とんらりの〜ひな〜り窓〜 牡年
 づるま〜あま〜の〜め〜 曲翠
 舟〜り〜れ〜砂〜す〜り〜さ〜り〜 萩子
イカ
 枯あ〜や何〜れ〜と〜 越中 馬沸
ヒコ子
 丸な〜〜月〜は〜嬉〜き〜十〜夜〜 壽仙
越中
 小倉の常寂寺〜 荒菅
 雨合下海〜あ〜の月や〜月〜の友

ア 十二

洞山忌〜〜り〜る〜の〜い〜あり山 浪化
 夷謙〜の料理〜〜〜〜ぬ〜 曲翠
 大庭〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 嵐青

芭蕉の菫波や〜
 ぬ〜〜〜〜〜〜〜〜〜

舟に福〜〜〜〜の〜や〜〜の〜 玄来
 そ〜〜お〜や〜〜る〜れ〜番〜も〜〜 怒風
 炭の史〜並ぬき〜のひ〜り〜 北枝
三ノ
 舟に秋〜炭〜一〜張〜を〜ち〜〜 滄波
傳
 炭〜〜〜〜〜〜〜〜〜 温故
カ

口焼や吹草ありの酒のうん ミ 竹戸

清ふのほろろも社おしめろ

ろよは清土のまじりきり

まじりきりきり

口切や海行英を筆くし 正秀

くろ切やこやし 木導

若ろろまこ土ろろ火雄 イカ

埋ちよ根あしの痛む 浪村

埋火やふしんを通え 許六

おろろ 大坂 休動

流ろくや 秋風

雑水よ 芭蕉

孫こ身の山田 正秀

割田よ水川 昌房

白了の根 支考

平変

桃隣

斜嶺

之道

芭蕉の位

セ 芭蕉

イカ 配刀

イカ 配刀

乙羽 李由
 川 乙羽
 此節 魯町
 室の糸をつまみしちまうまうけり
 され敷も湯くさつや澄まわく
 ゆふありや堤ようは片いさり
 砂川のちをちうちまはる皆
 うゝ鞋の目つらもつらふ舟のち
 鴨の背なゆい日やのちるるれ満
 うりよすはきうこや宮のあさ
 ちるるるひさささしてはみささい
 惟然 支路 正秀 孤石 舍路 大坂 會路

ア 十四

乙芳 草本
 米武儀おろしむさうりちる中
 宮やや片隅さひく斗れるす
 ういゆさやちを真ひてうら猫
 意くといいたくやちのかし
 大宮や濃のちまをれ空合せ
 子水湯や流しとこなま宮れ上
 去来 浪化 琴鳥

湯茶地のうらまをかうしゆるらふ
 如意、嶽ようりつる月の南の
 うりてうらりねくめしたるハ

のうらな月言こ月とこひくろ
望橋ふ柳せくえくやもれいと
宮うちや首くく死よ海のいせ
浪をとりや先よまきるるを持
あー代や辱くくれ下のうけは
茶の茶や嘗の子れまきすし
小坊まのよ下まきたり水仙花
きく茶の婦るこものそく日和
きく茶の隣もありや生大根
日の縁よあうる大根や一むら
さくくはや口付くち凡のむこ
いっくやあ吹あうるあうり

嵐舟
素寛
浪化
許六
不玉
荒荳
支考
嵐言

ア
ナ
ナ

河魁波ふ水のにくりて下は系

甘南

粥をくりん

いかにぬく

蠅はよの抽と思つと大所海

句空

星津村は伝わりりりり

うらまはては徳をたかく大所海

可南

形美れ子をくぬきりりりりり

曲登

うり金やまよとくれてまきれ入

爪玉

乃々猫のおうもつとまやまあうら

浪化

大文のまきくくひまをこ二人

おのうけよりまきめをまきく

正寄れは後まのまぬらむさ北

野坡

とうんしつうきんたふよ

うらりてく

まきくぬ水鼻くくくまらぬ
利牛

まらくこまふ魚はく老のほろま
野明

ままたさて机よむうめむむこれ
大坂 舎屋

まらめくく流ん乃の母のまきこらぬ
イカ 九草

いつくくまめひてくくまらぬ
せ、鳥吹

いこまらぬる流波の鴨川の
きくー 藤若ー

まらぬ離乃まらぬまらぬまらぬ
杜子

まらぬ鴨のつくとまらぬのえはくぬ
林江

流江にやまらぬまらぬかおらぬ
以村

白溪や子もあつまるまらぬのつと
せ、淑房

塩焼のまらぬあつまるまらぬ
セ、川

あつまるまらぬのまらぬあつまる
た、次

あつまるまらぬのまらぬあつまる
ま、生迪

腹のひらりと食へー神とま
野、童

籠子の尾ふせまらぬのまらぬ
ま、生

砂湯の朝うけまらぬのまらぬ
惟然

煤拂や二階をまらぬまらぬ
イカ 屋

すまらぬまらぬまらぬまらぬ
ヒコ子 黄逸

煤掃のちりにくまらぬまらぬ
吏邦

まらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬ

春うけく藤のさやうとて
牛乳子の角や侍らん
そと季のやみ日ふつとく
浪化

けい白の夏中に白ゆり
結りるま

望人よさうとよもさぬれ
芭蕉

春

むつろりと涙の枯木も
春うけくや風とて
檀もさく香ふさく
梅うけくみのもろ
梅う香よもつんて
けい白の城下に
けい白の城下に
けい白の城下に

春うけくや風とて
梅うや風とて
むめう香やさうと
浪化
芭蕉
夕里

掃切く梅くききひるまこのれ 涼葉
 梅くやあまをわらう村の口 呂夙
 志くくき松もわらむ免れ 如行
 望ぬきて魚洗くくく 素覽
 水場のまこほのくく 嵐音
 梅くくやまこひむむ 荆口
 ちり志海やくせう 許六
 竹簀戸はあはちて 夫州
 りり海をわらうぬむ免 社隣
 七種や唱あふくめる 北枝
 なるく 我
 殺くハ女房のせ 風騷

嘗れ小うりきなり 四方
 梅

別支考

嘗や鹿をもと 計徒
 化松もる果や 史邦
 猫の急風乃 風國
 文る松を水 川支
 背戸中 丈艸
 是 支考
 出智や酒の 路健
 山 洞本
 やま 支考
 暖の雉 関河

やまうしつれ夕裏さやまのま
終まなくやほりくハ滑る浪の上
子をつましく山石ふゆりむく終ま
ほつりつと終まつくなると本丸のま
露川

源平の古戦場をうらめて

ま庫ふつて

便船やまきたれあまも塩くのみ
にぬらんもまよ入しや空ま産うこ
あまをま遊しけはあまのま
あまのまままま
史邦
千川
万里
千十

いせよりいせまうのうら

層れまま終くと何百里
支考

波えや勢田の水以ノ滝 月
嶽よふしや細場のうらまを貝
あまのまあまのまひまき小大
まのまよ陽まらりやまままこ
のけりやまままらあまあくのま
陽まやままの流ま水なま
陽まのままま田まらる橋ま
曲盤
平水
其礎
李由
惟然

老鏡

九月より春ままそ花乃を松
えおしりや里に橋まハあつまよ
まの流ま橋まらてまけふり
大佛まよらまなまら入の川
利牛
不玉
風麦
良品

水尾の尾よたまたまさつらりし
 鷺の尾よたまたまさつらりし
 鷺の尾よたまたまさつらりし
 鷺の尾よたまたまさつらりし

正秀
 曲翠
 麻三
 子祐
 壺蛙
 野明

白魚やたつて水らん流る川
 とたつて水らん流る川

白魚

志く魚よ透ても見えぬ魚のくま

世翠

舟のまきと丸んくんとさつらりし
 舟のまきと丸んくんとさつらりし
 舟のまきと丸んくんとさつらりし
 舟のまきと丸んくんとさつらりし

木導
 致
 林江
 配カ
 園友
 土芳
 宇白
 雪芝
 其繼
 残香
 浪化
 芭蕉

姐の鬘をなうんやれよの那
ふちやうりてきこて柳うれ
をいよやうたもぬる程の柳火
待まよ小さむい雨のあしと死
曲翠
去来
採芝
放風

梅をとかし程とらよせぬそ
いれよぬぬいろのまねくらよ

花よ程ぬけよとくいう嵐の果
片尻を中ちようけりもれ遠
一本をころりくともれ又うれ
花又よもくせぬ里の太れあま
ちうつとよなうりてとれ又死
喰およ喰入や門ももれ又死
芭蕉
夫州
浪化
玄妻
正秀
古
嵐蘭

寺中花

小堀まよとくぬくのくた又死
ぬりまよたよの末うあし死
あつてのこまやうりまらりり
物干やちちまうくせぬ花のま
花の中を世をいり入日うれ
も追くたつりりすも程死
ういあやまのさうりよ門の鏡
あちうく二日おしきぬ中死
古封切る店下の屋つとち
其継
来儿
史邦
樹水
卯七
想風
風睡
市
支老

東叡山

ハツとこのふれはくや一つみ
其角

目技のやまのなつて

悪僧のうらうらあゝや山はくま
孤屋 野明

ま白の本取てあやうま

やせうまうらあゝあれははは

うらうらあゝあれははは

ついでまのやうらあゝあれはは
尾頭

うらうらあゝあれはは

盃の中ふさふさせんつかす
示蜂

山吹や水もこすこすむさむさ
石推

やうらあゝあれはははは
茨子

ふさふさあゝあれははは
為有

ア
三三

やうらうらあゝあれはははは
木枝

根のふさふさあゝあれははは
荒葎

ふさふさあゝあれはははは
文鳥

梅うらあゝあれははは

うらうらあゝあれはははは
素顔

三月盡

何番れあてつゝあやあやあや
野童

復

けしきんしきい海らん川むく
 時る二ツの橋を後乃景
 けしきんしきい鰻の志まらん其
 頭のくふむせしや摩所の時を
 啼くくふむせしや摩所の時を
 竹の子もひりきくおとく時を
 麦めしきい坊ぬちやあしきん
 ぬまきくあふくくふるそ時を
 句空は清作、山もよまあり
 くらをくくきく

大草
 惟然
 許六
 支考
 如枝
 李由
 えん
 甚仙

豆腐くもあの山きけしきん
 浪化

けしきんしきい鬼もなうりりも
 若うりやもくすくやなうり
 衣文 雑巾ひくくあまうり
 昔ま細ちくくうりひくくもの
 竹の子や尻骨やの出乃あまうり
 けりの子や皮つさくく甲武者
 海さくくくくくくくく
 くらをくくきく

句空
 雪芝
 之道
 呂風
 朱迪
 智月

竹の子れまほひや人を付見敷
 李由

うん

巾の子乃上る。鼓や存しゆのなほ

許六

既をあけくまうりりけしめま

斜嶺

ぬけらやちゆひちくきしめ

九次

むまにの。息吹のしやま楓

卓袋

芍薬や序終さひしけハ眞のあ

支老

艸もきやとくうくふ百合のえ

宗比

人く川崎まきくうて

妻れ種を便よつむ別うれ

芭蕉

むさ秋と守のふとあらたうり

風蒼

苑瘡とる。吹もつえりり妻の秋

浪化

妻松やうんほくと海。測のよ

和末

妻うらうらむらうのせりり地まき

平吏

妻笛やふりくふあより柳ほら

魚日

夕やま鳴やむ妻れくうんわく

野童

一朝は降。志つありり妻ほらり

平水

え禄七年久しく改らりる

妻

妻れおこやとれりるをねく

ちよその万僧供養よ治て片

ほくうに一巻をあしうらふ

ゆくまよつうらうて料豆

もたよきハ控しゆのうらひ

あまのこころのよき花のうきせ

結びたり

短衣やも紅負しなごころに
物然

あやめさう糸飾のようろくもさる白
木枝

大井川水出くは田塚平氏の

かこふとくゆりて

はしこれのせ吹物せ大井川
芭蕉

うらのやうあき

さみこまきや掉よふまぬる十巻子
左柳

あいらるまゆりくうらふいりこ
里東

高白ふふ麻の守もやみりあ
舟

狭くしるまのるめたる田植
示蜂

ア
六五

鶯の巣や 螢もくうけ
荆口

たつやれふさるる
荻也

顔つさや 夜の裏葉の螢もく
荻

水うもて 跡ふらふ
回見

蚊の中を 刺つてみり
南文

落川つ着さやうくくみおろ

しつとふりぬさ

水鶏たぐく人のさや
芭蕉

くるまはまきこころの川く
玄虎

うらりよりさるる
半残

水札なくや ぬ浪たる
玄末

くくるや日れさ
錦水

片碓ふもやためりや蚊の争ふ
蚊の争ふれ中ふいさうよま蚊のれ
蚊やうもやま蚊よむせむ蚊の書
許六

訪農家

水乃下とささきさのやりうれ
野明

客とよつまけり蚊の争ふ
為有

妻をうしなひきりぬ

子と孫をくねむ人なご蚊をれ
不玉
きりくと源一くねむはうやりぬ
毒来
くく孫をこく入る蚊屋の内
史邦
物つひのきひれ床や蚊の争ふ

目のうけをむいて蚊のさききりぬ
九節
昔一とや世多うけり牛の蚊
孤屋
町幅のいんさなうり架京れ友
森隣
あてりううき孫のおや友の亭
野坡
けききまううぬ夏れ虫陰火
正秀
月代ふおめうて花々蝉のうら
向空
時くお寝ううあやよるの蝉
子珊
陣もちや蚊のなうひにおます
智月
あめ坂やいとせま合せう人のこ
乙及
そをみとなる備くかくを信う
以節
志うつくカやのこれ蚊のうら
支考
くくや瓜あむやのあせ信て

ちよこも此爪の白ひや市あうり
 葉はうりれをあうりま葉爪
 あうりてこほかとすくま葉爪
 水仙のちりけうりまあうりさ
 るの月れおろろくまあうりさ
 解のふれひひりりくあうりさ
 白砂ま花あうりひくあうりさ
 立今く牛うりま朝のあうりさ
 異き目やる屋のなうり糠俵
 上下とひゆる枕のあうりさ
 中川うりもゆるうりふも異さ
 う流く人も花散なり竹ぬ人

夕光
 正秀
 游刀
 雪芝
 牧童
 野明
 遅望
 探芝
 怨風
 魚日
 遊系
 卯七

夕まふ吹ちるまのや竹乃皮
 白るや山伏里に入うり
 中ふまやうりちり物る水の穴
 妻うりり一花ハ粒うりま
 りき鐘のひきまもあうり
 異る花や井うりふ水なき夏の月
 らやのふまる遊なくや夏の月
 夕鳥やあうり一花あうりま
 中ふうりまをうりうりま
 夕影まうりんひやうりま
 目さうりま茶やうりま
 おうりれいままわうりま

沢雉
 万乎
 望翠
 山中
 山紫
 北枝
 燕子
 据道
 我家
 即高
 芭蕉
 吞舟
 一鷺

くくくふいりこ喰り草花
たつ川も一掃つくはく竹
磯まゝをやまよとく舟の日和式
史邦 空芽 惟然

淀川舟

浦くわうーらふ実なき板舟
かゝむしれあとうくくはな
種麻やくくり小殊るや竹富
やのみさの顔ちうーや麻呂巾
おりくも田草の敷又ひく進り
川稻や村ハ清き水敷乃縁
る柄敷をさるふ割込清水の乳
先るれ皆志あり以清水の舟
風着 浪化 全 壽仙 如行 嵐書 野徑 猿雖

あゝあゝく粒口まよる清水哉 詩六

老慵

昔も志あり縁まよる所は涼み哉
葛布おきまよるしれや夕まよる
娘つまよる涼やせいのまよる此上
とまよるる店丁まよるすのこ縁
すまよるちやおつてえまよる生鱈
凡まよるし猪巾まよる心れ縁
出娘のおまよるちやまよるし
すまよるちやまよるし行まよる
里の子れまよるのまよるすまよるれ
砂川まよるしまよるあまよる涼み哉
祐甫 賈山 亀水 其継 卧高 洞木 仙枝 里東 万乎 士芳

そ〜〜水の流れは白田なり
涼〜〜や八人代ハヤの田は草々
〜〜〜
本草

紀の友代を通りてはけきま〜
〜
門つら押出〜
〜
のらおね〜
友代や〜
善まのや白地ハクヂの風あ〜
良品

町れや袴れひり〜
〜
水々月ツキをま〜
八重〜
あり〜
おあ〜
響乃子ヒコや野分ノノにぬ〜
去来

元禄八乙亥歳花老上旬 正竹書焉

芭蕉庵小文庫

本堂の情もや生ぬくまの草と一これと云れ
義のむねかきしりかめ塚の塚をなする處を
凡雅を比惠目見れまよ乃こしやみひぬさを
むさくぬくぬるまなちるは長溪寺の禪師ら
亡師と一ころむ山日かて種くをりれ例の
杉風かの寺ふひし川の塚をほきてけふ字紙乃
やころかきまきをうれる一帯を盡すは池めけ
塚のありしころせりまねしもうね又志をけく
せく情をくろひるをまのふれ師の思を志
まらるまらる一は願をまらるまらるこの
形は石牌をまらるてまらるれの芭蕉をく一は塚

此松子、形多、其葉の、
たまたま、

史邦

日乃、氣の、
好、

小文庫

多之部

湯田の宿にて

と云

宿か、
時雨哉

旅宿

く、
又、
山店

米、
嵐作

雷、
夫草

食、
去来

板、
史邦

雑考

多うややとぐもはにけり此水くらき
ほくげもやときおの山乃九十月
城山より雉子かりり小十月
まこと穂小千音啼く初月ち松
まこと菊の野武さも位をわ小望由
薫おのこれてやうはら小枇杷の空
下列の女敷されいぬりはるれ花

嵐竹

史邦

山店

史邦

全

全

養浩

大通庵のま道園居士芳名を
こくこ志きし一たよく戸又

ユ
ニ

えむくはちさまてはぬふ
おの目をまては神を一夜の
まてはぬぬらわいなをさすめく
つよあててさすらといふ

まて

其くくえはや枯木乃杖の長 芭蕉

蕉庵師の傍る謁

芭蕉會くく秋り刺 像志前 史邦

達六會やもくそく食れ一文字 全

水風呂をぬる戸い道きお十夜く 全

所令講や油乃やう酒五神 史邦

上人の鼻ふくくおき 所令海 史邦

惠は其講酢亭ふさくはたせよりの
毛ひらき後あまを鴨ふゆよりり
ま川朝と字をさたりあ比を海
玉あつて百人前きおとりこし
清島越内儀の客が一ざし
檜物屋もるの河をせりおとりこ
たつとふしま川た所のねの坊
心よりけし馴て能あるまをわ
古後くしと思もむしはくまをわ
まを後乃字をさめしや鴨のしは

ゆらふ世をさめひて

芭蕉
利合
史邦
山店
嵐竹
養浩
史邦
惟然
種文
夫草

裏のほかきしこ唱於火桶ふ
火煙より霧より比ハ歌中しり

正秀亭當座

革羽織さつかくされて火煙は
風乃あつてさつかくやこ娘柳
あつて此敷さつかく小家式
風やさつかく娘さつかく
ま川やまの葉の黒き岩れる
ま川坊ふさつかく入る生海氣式
厚鴨やさつかく娘さつかく
毛衣小法さつかくぬこし鴨は
雞乃片脚法さつかく娘さつかく

芭蕉
三芝
史邦
夫草
残香
蕙芳
惟然
梨雪
蘇人
芭蕉
夫草

金屏の松をぬきよみくはらむ
小屏風小葉を挽くはれをすか

芭蕉
斜嶺

旅宿

大名此宿る由も福をたぐをすか
猫の食干ししてありさむ山は
取神よみ遠く喰志ぬをさか
菜をきこむ序数多き吹雪
留主のみふあまをすか神は
甲を干し何とくをさかや紙子
子糸や梅ま川 宿の赤豆食
子糸小月費はるさ出は月懐式
餅空山柑吹草ま川アや清く取

許六
山店
史邦
支老
芭蕉
史邦
山店
史邦
下風

湯具よ水のませたう神きり記
埋入の門をさるりはちりさ
く川をさるりはちりさ
妙多やをさるりはちりさ
言さるりはちりさ
鶴鷄家はさるりはちりさ
狼乃多やをさるりはちりさ

歩か淡眺を

嶽くや鳩さるりはちりさ
納豆さるりはちりさ
毛尻の客をさるりはちりさ
さるりはちりさ

智月
許六
芭蕉
全
全
如行
支草
史邦
史草
史邦
全

冬梅の目と川中や川やとるれを又
 多能乃花の言され日く半く取
 くらんやや宛態うらの丸す五分
 あふ態の寝首ういてもも柄う取
 丹波路やのあくまうちも悪を馬
 月花の愚う科立きり寒の入
 まるまや山伏村乃長げくこ
 一函や相場のう六取事一納
 身代と筆て志純りりこおさ兒
 金玉事一もはくくしりて事納
 山くれても忘るれさくん如
 眞も乃ふも志くんと一ワと進

土芳
 智月
 史邦
 山店
 嵐竹
 芭蕉
 仙杖
 嵐竹
 史邦
 山店
 芭蕉
 全

さうとりや一平むてくもくもく
 うらうらふささくも市北師走式
 蛤のいけれうひあき年の言
 さうやさや暖をなうれくもれ言
 客人のふり形うてうれくも
 酔うもきて密棋七年の名跡式
 いせ急ひさ丸あそり勢きり夜配
 保春ふ小孩事とらり療痘やこ

智月
 正秀
 芭蕉
 探志
 乙州
 之道
 史邦
 全

石白之讚

市中ふろくして俗言ようくはぬぬハ
 きふき乃始もよよくとれぬより七

その流をとりしる事下けりし
高山竹林の猛士もなをせきくに
寛平華山の上白王も後々より
ゆのしひきまのしはをふんぬる
白のむし乃く聖一國師ハを
しめて肉身をやしなひ法牙を
ち於民家よりいすこまき前
しうりも後こころをふり
ましく片時もあまらる事
ききうさく論をれ役の
優は女塞のちの中ふかくて彼
さうひを道一切の上よる

上と下とゆふ川なりはカキ
さか者のこと免又専なりハ
以土間ふりて越えりふを
謙しそふ事の調くおふ
とやうさも黄姉れは
さうのまうとぬく
梨さうる目わさ
うはをを荷ふ老の
あゆむしとぬす
と李れく剣を塚
ら何屋くをぬ
あきとるうとぬ

形一まこむとのんをみこりぬ
のむらむらむらむらや月こく乃ほふ
申ふく何のうまは又独をとおりの
髪をほら糸甲くうは佛れまの
ととくは河の海なるあてくく
こくくをそくくは扱くくはかふ
そ飢をくくくくは文王乃路ま
仕きくくくくは事きくくく
やいくくはくくくくはのぬく
くくくくはくくくくは代乃ま
あくくは枝きくくはくくくは志き
ぬく志ハぬさからよりあくくは

せねくくく

机銘

間ちまはれ時多いちをりきく略馬
吹嘘乃きをや一形く志はくぬ
くくくは書を扱くくくは聖意愛
やれ精神をくくくは静なる
くくくは書をくくくは義素の方す
入たくくくはくくくはくくくは一物
三用をきくくは高さ八寸おとて
二尺兩脚ふあえつはのぬくくは
卦を彫りくくは潜龍北馬れ貞小

おろしきをとりきりて一用しやむや
まゝに二用しきんや

芭蕉子求元禄仲冬芭蕉書

對門人僧

乞やをの煤小傳しぬ古合子

芭蕉

煤掃え説

明はのくそよりおのほこしくし
此こおれを多きを言ぬ
るしきしは除きのナニ日す
このしくぬれぬりくややを
の格式九重代町の法ハ和例ある

幸ありて唯なましくの人乃とて
しく辨しおいて面白き
門さくこびて奥のゆく間を
屏風さくさくひぬし火鉢
茶釜をとりて嫗々帷子乃上張
凡さくさくさくさくは
さむきをさく此日くさくさく
益なりなりあれ庭の隅調
とこさくさくさくさく
持佛のさくさくさくさく
めふさくさくさく家の童の根
やうれはのこ乃下とのさくさく

多むふと日後ハ事とあり
味もよりの大男の袋うらま
菘さうらねものつゝふ米櫃乃
サニうらねの組ちゝせり焼
ころりえてゝ山をるる輪あこ
はきのうのち花やふかゝゝも
の橋さうあやゝるゝ於よほと
たうく書てゝいひれとハかゝるぬ

こゝはさや書り宿れゝ野
なく終てゝ書れゝ終ゝ竹

えきぞ

山店

技持ゝこのけゝあゝよ人やりて
まゝこゝ終つゝとかなりがぬ家
風をたゝゝ家間を月のうま
毛蓼参のゝ家のこゝぬ塚うゝ
アワゝ終むゝは平野久法寺
丈ゝゝやとゝ味増つゝせまう
菘さうらねのあゝゝゝるあゆ竹
ゝゝおげゝ風のあゝゝぬ山さハ
松苗れゝえおゝゝゝ一里鐘
田ゝゝ屋の苗まゝおゝゝゝる
夏の月ゝゝぬ首首は雲へあを
さゝゝさぬゝゝゝゝゝゝゝ

史邦 嵐竹 養浩 執筆 店 邦 浩 竹 邦 浩 店 邦 浩 竹

篠原や黒く山をくつて
 馬をこくえてあふぬ顔
 どの花も酒毒がふち取
 年子まびきば董みこ
 二 歩築地の君も泣く
 家て垢く水風呂此ぬ
 友ありあうりさう
 花さうく 芝乃なひく日乃
 意人のい流、好又立て
 文引さいてほらげり
 盆あハ武守ふもつ
 隠さく京の月をさるる
 邦 竹 浩 店 邦 浩 竹 邦 浩 店 邦 浩 竹 邦 浩 店

横乃ら川まきこころを
 篠原、くこまは鶴が
 千日谷乃 銀杏
 泣きささとあつて
 追く 留まを
 いらくと星の
 野ありま
 葎岸より
 夕日の公助
 分列れ
 芭蕉

小文庫

春之部

年々や猿又さそと猿猿乃面

芭蕉

皆れ海邊よみをときて

二日世甫と氷入

大津路れ等のけしめやなふ佛

全

ゆここれ机硯糸ハるぬくく
と〜〜〜みゆ〜〜〜法うと漢〜
きとぬひぬち〜〜〜世路のけしめ
いさけ〜〜〜こち〜〜〜こは〜〜〜

五十一

と眞〜〜〜や〜〜〜れりるあるれ核分
越乃菅蓑〜〜〜葉の杖は〜〜〜
自畫の像世志あ〜〜〜きはぬり
花洛のよみ五雨亭小遊看〜〜
や小付一所不住の〜〜〜と見〜〜〜
下〜〜〜ぬさ〜〜〜は隙の〜〜〜
現お〜〜〜あるき〜〜〜月をよ情おこ
家付は是を〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜
と〜〜〜生前のあ〜〜〜ま〜〜〜ちて白の
味を〜〜〜う〜〜〜乃〜〜〜む月七日は
〜〜〜り〜〜〜の世菜のあ〜〜〜の〜〜〜
〜〜〜御〜〜〜ら〜〜〜ち〜〜〜か〜〜〜

茅の穂よちりしころほりて
 打井の梅のうらみや粥くひと 史邦
 若葉流まん三浦北大助百六ツ 嵐蘭
 一ふの牡丹はさむさる苦あふぬ 尾頭
 根小屋まそち下しなるなめ式 史邦
 いろ水乃押りまきり根芥式 山店
 一村を鼓でくふや具足餅 史邦

いろあはるるあやあそむ
 きたる子へはくしんしき

菟蓐れさうみまきこし梅のふ 乙世
 寺乃名やりまねて梅れさうり 李由

うけ言や梅のほまこ下結乃あし 眞目
 物くくと菟植越やむえのえん 史邦

鞍馬金銀け強士う路るまで

いめう香やそとぐ膏喰れ火赤石 今
 白梅やたしうふ家となれあて星 千川

山崎少く

ちり梅や木食され料理人 史邦
 こもあふ柳れさう白志わくくぬ 芭蕉
 世白浪化子れありそほふさる柳
 の志わくくあし去まらせ誤りて

入集ししつて終つて常小けし
とこやまありまうこのほおてし
な〜ぬ

春水満四澤此意を

川柳ありしころ柴葉口 山店
ま柳乃漁須り魚形り銚つゝ 嵐行
川越し〜草子〜ふより柳ふ 岱水
泥亀り人をうりとも柳うれ 可長
ま柳〜とあふ動くやをう所え 史邦
馬糸の下ら〜り柳〜ふ 里倫
ま馬は吹出さぬり水は胡蘆 去来

いらあろれ風小あほとやいほ〜
草先や進多智れむゆ〜と家 史邦

苔清水

凍り〜と〜ふ汲于〜清水は こそ

ねぬ〜く

〜る乃木下小〜乾家〜ぬ 今

鞍馬

僧正の谷をよる〜は餘を也 野童
黒けのの松の〜〜ちや美 縁 土芳

呼出し小まてはうらや猫の妻
去来
穉余も列のこねし猫乃高
南都
あうま死に知りしもきく猫の妻
史邦

南都高

まやれや名もあはふ乃知れし
とせと

二月堂取水

水とらや氷の僧の沓れとや
全
味もまゝ人の契れふほひや撞月
史邦
蛇まよきまけはおとろく維ま色
芭蕉

多田の湯廟小詣

いさほひもさぬふ神れ籠子ノ形
史邦

栖去之辨

とせと

五号いほまのま小やあしは

あししころうれあうさて橋町
とりのまららるまこりし
陸月たさくまおね風雅え
よしやままこりて口もさ
むしよれハ風情獨中まを
ひておろちめくや風雅の磨

かたうらゝかたを放りし
拙を去腰りしちり百錢を去り
ほくく柱杖一鉢よ命を結ぬ
なす始りし風情終ふ荒をぬ
らんくは

重葎より上ふをさらし疎る

芭蕉

呂丸追悼三句

ちり葎ぬくあえれくくぬ石ころり成
ゆき江をささるも名流や世をの代
野をくくち然かくつとて俺月

會覚

去來

史邦

伊賀新大佛之記

伊賀の西阿波の庄より新大佛と
いふあま世とくくはなりし都
東大寺乃いしし後宗上人を
旧名なりしはしし舊里よを
うそて旧女宗七宗無心とり
ゆきりささるひ抱りてかた地よ
あむ仁王門撞樓のあはは松を
草れおきくふくつたて松のいし
事とりむ石居しりすくはれ
くくくくくくくくくくくく

いゝむなみかひいゝく蓮花臺
獅子のくまやんといゝく苔
あやを乃こまを流ぬかき
なる岩窟ふきまけてまふ
朽苔く埋まきくりゆふ
させ給ふはきくしんい
けくもぬく上人の神影とあり
めまきくる草堂のくはふ安
直まきくはみあふ人の力を
ほわやく上人の貴願のほ
なり給ふくはくはくは
て説くぬくむぬき石臺

ぬく川とて

夫六く陽をきくく石れ上

ととと

賀茂くあをひて

照はくく日やうけうふれ芝の川
志こまぬて苗代馬のあや
千刈の田をうけたり難波入
川流や流を休きぬる乃角
ぬくはく草れ登えやう乃
くくるや渾雞向く歌臺所
引鳥の中ふはく家や田博取

史邦 山店 一鷺 猿雄 荊口 游刃 支老

咲くは花の中よりし川櫻

芭蕉

三月三日堺北海邊にて

胸透て須を乃こむ波子
乃ほり帆の浪路をゆれぬ塔子
廣橋ゆは松葉はなふ家波子

史邦
去來
山店

さききり詔

一日此日をまゝ松のひま

史邦

揚州甲山

上代のまき目もまきまゝ山

全

おぢやと夜とくひのまか快

許六

下品の情

あさ川さやうらとまき安ん片は
下くもくお居おしとまあう
馬よまや畑の入なる桃柳
梅はぐれはふも各一屋あま
おぢお居て換りるま椿

史邦
山店
北観
山店
全

旅行

内庭を又せうけみり白は
堀記を流ししれおや蟻めり

嵐行
全

夏斗月是て暮人外 蓮草 山店

難波少く

海棠やお八州からむれき乃ま 史邦

僧衣草より別

懸蕪くか〜りれや若乃迄 全

万日れ小屋もろりり百子鳥 嵐竹

呼子鳥か〜く 雉水れ盤根石 史邦

西行像讀

と〜り〜〜〜

おののぬり日ま〜

は〜〜〜

草野

花さうり山を日ころれ何さほしき 全

損ふ〜食たをせりり花早雲り 山店

花音ゆ〜〜〜や隣のあおれ山 去來

ちう道や木のま〜通敷花さうり 洞木

村中〜笑下〜〜〜り〜〜り 養浩

系清も花見のたな〜ハ七を清 芭蕉

志〜あゆみ金玉様さ〜れよりり 史邦

菽陰ふ衛門様れしむらゝ那

山店

三月盡

赤猫乃うらうらとくつりぬまゝのそる
新衣はあまの穂がはくまのそる
水風呂の垂るぬしむらゝ那

山店
史邦
嵐行

三吟

嵐行

桜又乾油ちいけしや田舎深
麦の申うらうらひぬ啼ぶらん
うらうら山をうらうらふまらぬ
ふらふら路を指しむらゝ那

史邦
山店
行

玉川ぞりとあまの月乃ふぶら
堤煮厂のさうらとらちのれ
ハ歌れさうられ刺ふほららん
歩の徒されすらふはぬらん
種蟬乃いさくはらぬらぬらぬ
さうらうら馬を引とらぬら
さうらうら肉後れすらぬらぬ
けし難もいなむらぬらん
さうらうら風ふらぬらぬらん
お菊れ月乃さうらぬらん
あまのそる腰ふらぬらん
六帖しむらぬらん

邦店
行店
邦店
行店
邦店
行店
邦店
行店
邦店
行店
邦店
行店
邦店
行店
邦店
行店



花のうき縁日けり掃くごとく
 源路く河さく赤土岩谷
 ひと川でも皿の掬くぬ小滝廻
 二 富背中とくくくも久せん
 昔うきく啼きつりくるはくま
 山さき赤茶屋もききあつらうら
 本堂を右へまうれば及歩ま
 ころやといやる狐もねぬく
 十五夜を吹ちくく西乃空
 稲より多は祠ホコラくくく川
 竹藪の鴨上戸くくくくく
 又きくくやう流くくくく
 店 邦 竹 邦 店 竹 邦 店 竹 邦 店 竹 邦 店

一くくくくくくくくく 朔者 店
 八専あきくくく 暗くくくく
 庭くくく松や小笹のくく所
 返事おれくくくくぬり臺
 接くくくくくくく通れ鉦くき
 やくくくくおれくくく 所乃朔食
 景れくくく山けつくくく花くく
 帝也鳥のくくれり梅もは森
 店 邦 竹 邦 店 竹 邦 店

花乃雲鏡以上野く浅艸を
 芭蕉

小文庫

夏之部

文字摺石

あし乃郡しれいの里しや文字
まらまら名あしと方二間はうら
石あり此石をむしりて其れおひ
石まかりて其の面は文字なりし
りや山藍摺みしりてあしよあし
しきくおほくしあしとまら谷
念ふ埋れし石れ面は下さぬり
あししれはあしとまら石れ

あしとまら石れ
あしとまら石れ

くま

早苗とほしあしとまら

前虫とほしあしとまら

一川殺てまらあしとまら

あしとまらあしとまら

灌佛や親述と提婆八法

落柿舎閑居 暖味日記

あしとまらあしとまら

あしとまら

郭公鳴や御衣れくふこつと
夕やまや影りくともみけいれ
かゝまけんすけりく首れ丸森まで
夫草
山店
倉水

員法ふく

おまへり鳴やうんけいれ
史邦

あゝ

ほろりたるもくしりあや遊ひら
ほろり

次

月をるくもおだるくも次なるま
全

佛頂禪師の庵をきりく

本はくさも唐多破くさるあま
全
葉はくくやふ体仏のみくさく
史邦
核のうあく川ぬきふく葉より
嵐竹
太鼓めく母の返を返に葉撥
史邦
狭延れぬく踏あつく葉より
山店
菽時や穂まよやくぬく花
荊口
かゝたのく乃唱く是く格のた
史邦
山標やりのまふれくさく一志より
北鯉
ふみきりくくは返くむぬき
乙州
よを馬れ去くもの何ちく紙のけり
嵐竹

乙卯餞別

花叢に秋多あふとけりとも 山店

落椿舎深居 蟻蜂日記より

抽乃花ふしうとみよ料理者 ともを

けうやく

けの川うづ 梧ふたうぬやあけり 史邦

五月るや 蚕うけりふ葉乃とて 芭蕉

無病さや物うらうらて五月ぬ 史邦

ささこちれぬとてさやとけり周 山店

川乃ささ狐火さやほとてふも 史邦

葉橋や山石さやまははにけり 養浩

只おらぬ交れらるるやふ花 山店

間不容髪とていふ事

けささけ起合さうらあまのす 全

おろく

ささささや 尾越れ鹿乃ゆひ物 嵐竹

月く

草山と蠅取蛭けさけくはひ 史邦

菰のむすぶやうく乃乃沼里式
一田はくけりめくまうやうをまき
虫れ喰夏草とんくや寺留
卅筋 北枝 荊口

卯月れくく免座あ海りて
旅のたれをけくは経み

なすの衣いまく風を取はくま
りくまハ蚊のちいこまを絶き也
くま月乃竹の子くれく生れ
六月を志のめくはくや宮れ下
とま 全 去来 東以

正成之儀

鐵肝石心此人之情

於てくまふくくはなすくや楠れあ
接子りくゆんぐく一や川ありり
初うめふ風乃これやや葛を何と
五六十海老はわや一と斃一川
や後くくとまやや川鈴麻山
や少くもらや蓮れ葉はゆつはのくま
連のまらちるやハ海宏みくれ口
澤深そくゆきのほを沢急くれ
麻乃葉のあくくむくまをまき
二日月れりくくむく居れ様麻
嵐竹 史邦 嵐草 史邦 木白 史邦 之道 全 嵐菊

麻叶て風もちちとを以小家うの
蠅歩小形おく雀を子飼う家
日此勢やうおくくくく百合の花
鬼百合やうんとひいて蟬のうき
水仙乃種を千日やせまけあう
素花蟬まゝしたる急や暑さあう
鴨の子の芦根をぬきぬあうさ
相矣
乙品
史邦
素繪
河瓢
斜嶺

甲斐郡内をよびて

道けふふまのてうとこれあうさ
あさうふれ二葉よううたあうさ
煤下れ日登あうさ
許六
去来
怨風
臺所

旅り

瘦馬れ鞍つふあつさ葉一把
宰人して東武へ下れ日
栗田はうて
史邦

よくかきまを忘ぬはうり那家暑う那
まゝしうやん蛤の口乃砂
全
句空

夫山之像湯二句

風うけり羽織ハ襟もほくろくも
さうさほふ扇をうきまて涼し
芭蕉
夫草

琴引て去をうぬをよ夕とく又
笛亦よ日うをう出きてよとく
石竹ふ葎とくくや砂むくを
史邦 山店

ゆき

あゝ波や河まてく涼しく入日乾 全

鴻之臺眺望

切岸や卯れ花下く一文字
安房上総くくくくくくく
うたやや丸右よりれてき
山店 嵐行 史邦

岡吊古戦場

山をの根れなうれより生れく雪を
南よみきりぬく未申小河水を
くくくくくくくくくくく
ち山をまてく雪を改くく雪を
くくくくくくくくくくく
おひく世とくくくくくく
や百乃秋の夜むくくくく
きくくくくくくくくく
乃くくくくくくくくく
のよくくくくくくくく

いちまつりま松梅ふとさかへん志を
つこうれくわ乃るるりらとあひまを
きよ時鳥のくももく西記を斗
ぢれも魂魄の胸をくくや
い〜と後よそ〜

幽冥れあをむむもや花うの
い〜のちの荒てい〜に友母の
黒さのおく〜く〜おまき葉は
山店 史邦 嵐竹

首塚

首塚やとげよ〜ら花むほ
史邦

首塚やとげハ草の草かくま
そ塚や人もわ〜ぬ夏つ〜び
山店 嵐竹

真間寺

真間山や茄子れ時む〜縄
まの山や麦も梅も寺の分
さひ〜は小涼〜れた真間のま接
山店 史邦 嵐竹

同所楓

日蓮をふ〜も〜れ若楓
この食〜葉遠くおや若楓
大木や〜何ま〜れ〜の楓
山店 史邦 嵐竹

同継橋

継橋の田うゑや寺は男も
はさ橋や田草もうゑぬき水
つとどりのあはれ田の水雞成
史邦 山店

帰路忠吟

ほくよん水戸海道も宿船之
や河空や情をもおろし浪も
舟梁もまろくまろくはなす衣
史邦 山店

餞別

山店

新麥はらやとて先ぬ首途ふ
まゝ相取屋れをけりり
馬時のこて淋しき牧の野ふ
吹子千石をまののこて山
さくし一留者を引けり昔は月
躍乃た法をうれもおほえに
盆をのびく寺は善徳して
はくしうれ共ふ事をもく
蓬生もさるをやめしは男婦
濕りぬきくれりゆは南
店 蕉 店 全 蕉 全 店 全 店

丹波く〜使えぬ〜啼 蕉
 葛季ま〜あれ〜利あ〜きぬ 蕉
 ち〜お〜土雲賣を〜蕉
 ち〜京中〜月〜蕉
 神鳴れ〜沙汰もなき 蕉
 志や〜花を〜蕉
 奥の院を〜蕉
 き〜平〜乃〜蕉
 志の目ふ〜蕉
 う〜や湯漬〜蕉
 い〜股を〜蕉
 月〜あ〜蕉

う〜櫟林は日〜蕉
 佛の本坊を〜蕉
 こ〜と白杖〜蕉
 羽〜草れ〜蕉
 羽二重れ〜蕉
 け〜神〜蕉
 雞を〜ぬ〜蕉
 畠を〜あ〜蕉
 日光〜〜下〜蕉
 ら〜の〜蕉
 申〜生れ〜蕉
 お〜や〜天月 蕉

花のあつらひの神のまはしつゝ
散られりし黒谷の虫こもり
全 蕉

甲斐りし

り約れきふやうにやうり
はせ

小文庫

種之部

し川姑やまゝにぬゝに蚊の巻
とせ

吊初秋七日雨星

元禄六文月七日乃夜風を天よ
白浪銀河の岸をひらいて鳥籠
橋杭をなう一葉握をぬき
きした二星も屋根をうらや
るしと音おもひしと
もあはれしと一燈も流る

おろしー 遍昭小町うらなひのたけ
人ありききやうし世二首を擧
る星乃心をぬくこゝろを

小町うらなひ

さる水ー 星も遠きや岩れ上

芭蕉

遍昭うらなひ

七夕よかきこひはらやー 宿舎羽
西風の南よ 後やあすの川

秋風 史邦

関之説

色き君子れ悪む下りー 仏も立戒
のー めお通しー じりもはる
捨ー じ情れあやふくふとる
うー こもおほりるー 人志をぬ
くー ぬふれ梅の下ぬー おおしひ
のか乃白ひよー ぬのぬのぬ
人月夜園ももー 人たてー たいさ
けやまらちとー 仕出ておあまれ
の浪の松は袖志はぬー ぬのぬ
身むー ぬのぬのぬのぬ
老の身れりまむぬのぬ
の中ぬをらー めー ぬのぬ

ついでに、おぼろげに、
て罪ゆるぐぬるゝ人生七十を稀
たつと、
り何れ二十餘年や、
老れ、
五十、
より、
育、
是れを、
おろ、
煩惱、
この

ふく世の、
魔、
生、
華、
を、
の、
毎、
は、
を、
女、
て、
戒、



こころをくみくみしり 曠捨の月
 ともむしきとらり形りりれこ八月
 十日このの西をこころ道となく
 日遊とくけきけを夜よ出て
 昔よ草花と思つたよとらとら
 昔の夜はくくおの里よとら
 山ハ八幡とくくくく一里
 とらり南ハ西南よとらとらぬ
 しり冷しとらとらとらとら
 かりくくく岩かきとらとら
 只よふと山のよとらとらなく
 さえとらとらとらとらとらとら

一ノ四

けくくくくくくくくくく
 何ゆらふく若くく人よとらとら
 昔とらりよとらとらとらとら
 けくくく

侍を號ひくく形を月乃友 ことせと
 いさよひよまよとらとらとらとら 全

前書記きくくくく

夏うきくく名月あつとらとらとら 全
 名月や月よとらとら 込瀬くく 全
 世波よとらとらとらとらとらとら
 系流くくく京よ海くくく

鴨川や月見えれ客ふりあり
 去来
 名月や夕日ふむう小宮さうふ
 塔山
 名月の西よりうらた八坂屋たご
 如行
 名月や佃を越せはるきうたう
 山宿
 名月や草花園こふ白き花
 左柳
 侍の身をかたけりて月こふ那
 史邦

常陸(まうり)の耐

船中(ふね)のうら

あまほのや女七おもこ日丸
 芭蕉

堅田十六夜之辨

望月れ砂真なをやふの二三子
 いさめく舟を堅田の浦よらん
 其日申乃時とより小何某系系
 成秀といふ人乃家れうー
 ろよかろ酔を狂客月よ
 ううねくまあうとまうくしよ
 よほゆる思ひくさあやうらき
 らほろひて空をまのたきを拂ふ
 園中よ芋ありけくけを鯉射
 の切月せらくさぬをいしく真なを
 きく岸上ふ蓮をのゑて真なを
 毛よ何と月けまのけくもなう

けし出湖上花やふてはくひて
さく仲の秋乃る月の月浮序
堂まよひてまよひを積ゆり
とうや今やまよひを積ゆり
まよひを積ゆり
別進おのるまよひを積ゆり
小山巔をまよひを積ゆり
月三竿ありて黒雲の中まよひ
り河まよひを積ゆり
まよひを積ゆり
まよひを積ゆり

月雲の如くも水色もく全風報
波千体佛乃るうりま映入り
うまぬく月のおもひのまよひ
まよひの歎息れはまよひ
十の束のまよひの中まよひ
無常の親乃たまよひ
世常まよひを積ゆり
まよひの僧都のまよひ
まよひを積ゆり
まよひを積ゆり
まよひを積ゆり
岸上まよひを積ゆり

横川よつゝささく

とせと

鎖明く月けり入よ浮清堂

安くと出くいさよ月れを

鬼灯は実も葉もわらぬ式

鶏既了うを合せりり

枯乃るり葉あふりや雞既花

花昔や松ぬたきふに田成知

とやくやとと志のますも昔れを

る晴や燦のこころくも乃花

別なり明日は日而昔夢の花

いなきまやぬらとあては藤原

全

全

史邦

万手

史邦

山店

嵐竹

風竹

史邦

大見

稻妻やうこの面をひき免う

史邦

小見

蟪蛄のはりる胸のありて

全

鶴鴒やけりうせうら白川原

氷固

とたさいや壁土こぬり畔のう

磨盤

夜露の目もいり名昔ぬり啼鶉

とせと

むかすきよ水を待ぬり鶉の那

山店

と川鶉附計れいもうせり

史邦

道く乃鶉はくらん葉とり

嵐竹

高きあまの袖ぬれてゆく鶴うね
尻より小ななくや新緑の春のあま
寝くまの床より後うね鳴る子丸
正秀 風腫 一砂

東山をめぐりて二葉さよふ出歌

丈山乃庵きつ川こ引板孔音
忌時ハ糸もるぬ葉雞 既
史邦 全

前書はまじりて

葉の香や庭ふらぬる水苔底
又そこのあまや寝るは後の葉
はくの家をめぐりてはぬるこね
芭蕉 全 全

人々も古風なかりて苔と葉を
胡を命もまじりて物と葉はむ
借まじりけし一庵の雪やりの葉
あゝ柳やまじりてはるる葉舞
史邦 風介 史草 嵐竹

芽さきより二葉さきたる柿のまきと
ア侍りしはしのけ草一もや
をまきや彼を柿舎もよりこけん
くしをぬるまじりて

やゝく花を柿れおまも藤らの流
流柿をうゝ乃くこけをぬる一
木のすし狸出むる穂うけ丸
去来 大草 買山

やに葉ふあつたやなまきれを清く
史邦
虫の音や閑宿舩れ籬菊れ中
養浩
死もきぬ旅の寐れよてよ秋れくき
と成
種の手も過ぎるはうとくわゆるりり
山店

嵐蘭追悼四句

うねりよや月よくまじりらる柳
嵐竹

菟麻れ実を志けりり出れ海う那
山店
うこみあけいつきれ草を墓れあ
史邦
千貫れはうと埋りり苦乃あ
去来

うねりよや月よくまじりらる柳
嵐竹
うこみあけいつきれ草を墓れあ
史邦
千貫れはうと埋りり苦乃あ
去来

身の秋や月よも葉とぬ帳あう
史邦
りの音はは角れ新を志けり月
と成

葉れ唐とれまけいやれねなれ
ふふよのよとと地あをさるり
世ふは東のよ住る傍をさるく
西りのよまをゆるわうと山店
のせしきとさるりいうわりの後をさるく

えとの坊やのうらみ

紫の月のやまはあゝこ坊

芭蕉

仔細又まよふまよふ

ゆるゆると書きの男の心

しをぬくまぬくまぬく

猿の心をやまゝに

かろ日向のまき葉を切る

まよふまよふまよふ

まよふまよふ

月さゆゝ明智の妻の味

芭蕉

秋をゆく蝶もなめりや

全

梧うら秋の終りや

全

ゆく秋のなごも

全

題鷹山別

正行うかむひを

史邦

題司石

挾箱さいつく

山店

題百景

百景もはくや

嵐竹

三吟

史邦

帷子け見ふととほく鴨のよ
 初き舟を橋のちとこ 如人
 夢の極は雲のうらむとて
 市は人のきくれ夕月
 木刀の書たつくらるる
 二階つくこれすよ裏板
 室さくやよ茶の下をぬる
 石甲やれんを縁寺れ鐘
 手卯又難急ぬるんがら
 ちいしきとてまけぬるを

水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦

乳さしと隣の胡系乃と合て
 秋入るとこのお助きつとく
 塩湯よりうけぬる月
 せぬおぬるちのいささ
 持たしれ新判刀もさひら
 古きとて家のめらぬるもの
 花小あむむ一帯あはる表
 小姓の口乃ちとこ 二 月
 竹橋の内よりとて心氣穴
 馬の糞うく飯もいそり
 夕らぬは洗澤袋をなけ込
 とぬぬもつらとて乃吊

水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦 水蕉 邦

梳りよまれとおし急ひす海
 世あ〜く〜ん明日は〜れ
 水あ〜ひのぬきて床より坊子世
 百里そのま〜船の〜ぬく
 引刻〜く依杖まの〜思ひ
 ろりもあ〜は〜ぬ中〜生う〜
 〜〜〜流る令形と月の昔
 り〜あをま〜く〜時乃山色い
 摺鉢より〜て色付〜
 障子〜と〜ぬ〜宿〜えの〜船
 水南言路〜の〜り〜と
 二夜三日此路〜あ〜何〜と
 蕉水邦 蕉水邦 蕉水邦 蕉水邦 蕉水邦

考て〜〜世よの〜ぬさ〜り
 百姓や〜と〜む苗代乃障
 蕉水

座右之銘

人の短をりふ事なれ
 己う長をりふ事なれ
 抱は唇寒〜種〜の風
 芭蕉翁

ふるる掛集序

吟海はあふり——知是亭小七友とせとのあやりのまは
らり藤村はらくけあき名古屋あつこちあき素本名
大畑もまこきうこきうけ小切通ひて残生を
送くんと星流の子をれ吟もけお乃こふなふあはし
の知是亭とを身よこえても極の風月をさうこあひめ
子きうけこ名付て他乃世よもんそあうこてんこの
あこまうこつ極ふくら来下れ人こなりぬも子蝶羽
又のいひらんらこいもあなうこ思こいもこり志ま
きんあなうこわてんやこやに近く星をれとあもま
世の風体もあつこちあき名古屋あつこちあき素本名
むねこちあき名古屋あつこちあき素本名

あつし〜夏もあつし〜うらた陽あつし〜あつし〜
ちり〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜
あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜
あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜
あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜
あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜
あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜
あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜
あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜
あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜あつし〜

松尾の里み路人のまをせやうと秘さめ此里よまのむ〜
をたのひ夜をの里乃秘さ〜たのひ夜をの里乃秘さ〜
上野の原を〜ひ面を〜ひ面を〜ひ面を〜ひ面を〜
夜も星露の光とあ〜つし〜松尾雅れ友と〜ひ〜
ほろ〜りあれ〜ま佳真と〜れ〜〜せ〜むむなる〜
〜せ〜あ〜けあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

正徳壬辰年 林鐘下浣

武陽散人素堂書

千鳥掛上巻

芭蕉

星掛乃園を天よりや啼きよる
 水佃ふれ 蟹乃 埋 火
 築山入ちもさき一梅を植うけく
 あもくふ子猫のすぢふを川く
 夢の吉原を待月のほれの色
 思乃らぬとれ野をさき風
 一里れ雲母なる川と
 福ささと知て門をよむらる
 市山あはさくをを所えくれ

足 言 重辰 如風 業言 知足 自笑 安信

牛よ 終のみくをささく年よりく
 叔父乃言すちのうさいひまき
 月夜ほくは螺を酒
 ち奴と甲をさうきて秋の風
 涙を袖もる宇治の橋を
 唐造る西の谷れあもれおと
 啄本鳥らくを救乃古枝
 吹巻くは食のつをさきり
 山をさあむとはさくは海幸し
 辛螺のれ油すくく為氷
 角あふ眉くは靴もるを
 待言の女を食さくは肉

信 風 蕉 笑 風 足 信 辰 足 風 蕉 言

藤の枝ぬつるまゝに枝あつてのひ
 羅ちよとて死所ようとていふ愈まん
 庶子よりあつりて家のはまお
 式日入り日入りとぬきくくはやく
 あさくはあまの 本流川に
 桐テテ願なす婦人まをま
 笠持テあふり堂火の影
 海月ふみ里乃娘の影通ひ
 藤はもう絲を 荆 神 川
 う 新島よはつては結けは南なす
 あうかひこのりくちなめくちして
 氏人のなを多き花はこの糸

風 信 足 風 辰 蕉 笑 足 蕉 辰 風 足 信 風
 言 笑 辰 蕉 足 笑 蕉 辰 風 足 信 風

かきつ飛夢もまはれまゝにあつす
 田せとてあつての心の名を回て
 のことこれかよはれまゝにあつす
 枕筆

如風

免はつてのまをまはれまゝにあつす
 衛士のまをまはれまゝにあつす
 清車のまをまはれまゝにあつす
 法を被りてあつてのまをまはれまゝにあつす
 矢にれまをまはれまゝにあつす
 かこのまをまはれまゝにあつす
 知 足 自 笑 重 辰 安 信 芭 蕉

りままははまのなまのまのま
 りまのまのまのまのまのま
 小拾ぬめとまのまのまのま
 洞のまのまのまのまのま
 引抜く琵琶の臺をまのまのま
 僕をまのまのまのまのま
 婦のまのまのまのまのま
 明日乃今下の飯けまのまのま
 けのまのまのまのまのま
 待つまのまのまのまのま

芭蕉

業言 知足 如風 安信 自笑 重辰 信 笑 蕉

其まのまの別のまのまのま
 ちまのまのまのまのまのま
 髪けつぬまの油れまのまのま
 身小瘡あつて秋ハ夜苦
 初巻乃外にたまのまのまのま
 楊枝まのまのまのまのま
 少神まのまのまのまのま
 こまのまのまのまのまのま
 又のいくさを記ぬまのまのま
 雲陰まのまのまのまのま
 翅強ぬまのまのまのまのま

足 言 蕉 風 信 足 辰 信 足 蕉 笑 言

志川うやの於亀は朝日を戴きて
 之度ほくさる轆乃うりも
 山も甲う車小ちるよむおれを
 輝やうりしてウをむらちかく
 流津はよは輝法のの船窟
 瓶うらうりききれささむら
 殿やききく月かむうの影やう
 老うやうりうりうりもあき
 ぬまうりうり槽の輝れきけし
 陳乃のうりうり其をゆる後
 山更うりうり母りぬきるぬれゆ
 と元さうりうりけなんばうりうり

信 笑 蕉 足 風 言 笑 蕉 辰 信 風 足

花盛文をうりむる家園く
 湯焼うりうり林垣乃林
 言 執筆

芭蕉扇かぐえし人を讀み
 ことばよ越へ序おり物れ
 伊良吉勝うえんと白浪する
 儲をほくひからうりして
 ぬのひり娘の衣をまて

焼飯や伊良吉乃言よと流せりん
 砂さむらうりうりあこれ流
 ねをぬくかや君うり白して
 芭蕉 越人

智

い川の鳥帽子の寝るまゝ風
眠るやうなるのあるうぬ寝は
畢むかえは然る疾る月
人蕉

寂照庵知是子の作
とて然る羽を居るまゝ

荷子

安んずるまゝを色にけし神もほころひを
縁を寝のまゝを足すらんあらしに
今朝の月影をふそあはれ又敬あし
里乃踊りし舞を氣にけしる
野水

寂照庵の詩集

越人

風を吹くや又よ縁をとおをりしは
るをりしはなすりあらしに
海土乃子よ縁をさする見吹く
春をさすりあらしに
歌をせん世名月をさすりあは
まをさすりみはれをさすりあは
蕉人蕉

海鳥の羽を居るまゝ

芭蕉

面ふしはあらしやたのらんを此雨

音仏畧

知是

神音や 瘴まよりのしるま合
皆くしら並ぬ樽の張分
つらき此白の静か風止る
こころはし今日にれ口の明
夕月の新月代又きこり
とまらへりくく宿る丁舎

園友
安信
露川
業言
加瓶

音仏畧

露川亭にて

智

千八

子海 秋今も名はぬ家の奥にある
小春の元れとけ けりあしと雲
おの里へ戻らぬ けりあしと雲
時宜きる けりあしと雲
秋もあつぬ けりあしと雲
けりあしと雲

露川
獨上
素見
吏明
執筆

蟠竜亭にて

音羅

源家へ星夜をこゝろまき
何をぬれけす けりあしと雲
宿と裁目をけりあしと雲

知是
安信

次をのこけこ白小敷れ戸
五ふそ神をのちこ片の上
うーのるまちしぬを月

蝶羽
亀世
執筆

多公署

から風や吹むく吹てま白ー
そらんこやしれを乃の義警
生奥のまくなひおの喜れま
小くくい月を今様始てる
新海を蒲巻といふ下り前
庭をまけしきうまとい

知是
路通
全
是
全
通

久龍もほきぬ浮世の楽をすの
ふの中てもとやれ念佛
まの雲乃下又さかー玉標
さめよりれ龍了存化務とりの
衣さるを多めて中る文のなる
あくたもくこ乃せすれ物あ
何所とるくこひらけさる中る
土をほらこて黙と 焼
冬乃月指ま八年の根うさむい
系へのゆる勢れさるぬ粟掘登
尺と奉ハ呻おもちうる花乃宿
髪もこちりこよ布敷ぬの嘆

全
是
全
通
全
是
全
通
全
是
全
通
全

名湯の全原はき土紀て
 口をきりけ八百はくしんたのら
 大屋のれ浄寺の堂も引繕る
 福く——とれまの堂——並
 後の月又てうう修れ十七夜
 芦橋乃中をものほれ新之
 ひしきさうりまのりてはる舞の声
 身肉をか——子に縁をくむ
 人まきん白髪天窓又絆いあり
 ちあつらさやれ情をすれぬ
 四糸より結句紅の甲小原
 じんらうらうて郭云 啼

全 通 全 是 全 通 全 是 全 通 全 是

小あの雲をひらりと落しる地雷
 おさあつくとすむ程強ゆる頭
 天井をよそしとくくを古法眼
 おまな屋乃くくく猫の穿毀釜
 り花整とら——とけまる大芝居
 猿をせは日乃永 項 上

是 全 通 全 是 全 通 全 是 執筆

そえ部後句

子る

安あくしをとりけやふとり足
 淡海深通しや次六のあまうけ

貞徳 徳元

菟もくもりく子もれ浦めりり
浦あれて子ももりも船大工
舟も寝ぬ報治火もく小夜舟
品川や壑をもくもりもり
せりしなや羽も中もめ浪名海
月此疆收る音の子もりり
柳敷乃身いりきり子もりり
摺板は政中をくや磯ちりり
ゆもれ津も食や磯ちりり
引波は子もれもりり
子ももりもりもりり
静のちもりの中りこもりり

秋風 守古 新足 百丸 伊丹 人角 長父 徳七 妻秀 金風 右馬 和膳 十六 味非 甘泉

淋しきの裏啼くも子もりり
文系夜れ子ももりり
方香乃新や心の小夜ちりり
いふなるもハ室やあけ子も
不二くはる流の夜入て子もりり
親はせぬ物もちりり
ほく橋や波乃は室も子もりり
飛ももりもりもりり
待多すし風の夕れちりり
浦ふし子ももりり
交りもりり火焼ぬ寺にゆりり
四の二のめ名の縁もりり

文白 月尋 柳水 全聯 龍風 光彦 妻我 泥隠 鷹山 幸来 嘉樂 文翹

傘一海月相舎王とや後らとり
 天つるや女の筆此は清きも形
 浦風の妹の外よりみきこの乳
 曉の欠くなくうあらしり
 吟懐や就とか一はか夜子も
 淡子とり銀子の夜息よは夜は
 炉の炭を啼ふとめとるみき
 とはりぬぬ波や山遊遊て啼子も
 写とりよ唱海の快季や啼ちとり
 け海よ竹叩れ船引らとり
 鷗のあとん矢檣の子も此
 ねひりり波の巻と小夜子も

寸松
 法竹
 伊勢 父市
 笑翁
 三河 白雪
 桃井
 周東
 尹之
 如行
 夕道
 敷藤

不ひりさくまらるる再さ小夜も
 月名の波の園写ちとりこの舟
 老ほきくあたるものやあちとり
 淡まつのもやおほつて啼子も
 海士の径里や都し啼ちとり
 け浦乃功ちとりこの塗わりり
 浦の町やむくこれ唱海啼子も
 鳥さく写しぬくあの子もこれ
 海を田と埋て啼ちるちとり
 立波又新きぬく唱や小歌
 け里のねよさけとや啼ちとり
 往とせぬ来もせぬ浦の子も此

寺本 祖月
 暮岫
 萩 岩
 萩 獨笑
 大々 酒聖
 舟 鶯
 業言
 安信
 重辰
 雨亭
 自笑
 僧 牛歩

猫ニあニおニさレて鳴ふ小松子の鳥
 破ちとり鳴は今夜ハ幾日以て
 ひらりの浦やすとき小松の湯
 以用之危既やうぬちらうらうこの子
 吟後に浦之用たり啼らうらうの
 浦上乃出とうらうの家とや村子と
 亦て出る波をまらうや啼らうらうの
 和田殿の九十三之講や浦子とうらうの
 幾川ハ産之名と呼友らうらうの
 猿たうぬ耳は洞とや小松の湯
 破ちとりうぬちらうらうの文字つて
 以滿や表の二義を交らうらうの

一邑 洗古 扇河 蟬木 秋蒲 嬉斗 鷺江 鯉走 和子 一海 一温 泥燕

小松らうらうの松鳥とやたとこ盆
 うよまらうらうの人れ吟書啼らうらうの
 登乃うらうの鴨又眠らうらうのハ

龜世 知足 素堂

唱海知是子ハ芭蕉翁の古詩因りて
 猿森のまは見えぬと定めて因りて
 おやうらうらうのハまらうらうの今ハ
 おまらうらうのハまらうらうの又たらうの
 うらうらうのハまらうらうのお
 うらうらうのハまらうらうのに日教とはうらうの
 古詩の月夜とてハ芭蕉翁の詩に
 うらうらうのハまらうらうのお

招き遊を寝たぬたなうき
世の胸よりしりしはるへまむ
なれしきさうかあれやまん

ふき写定やゆしれ杖やまめ
け浦乃らうらふはる記念うれ
侍の志くもさうや片便宜
侍の結小もかきぬ紙子う那
若くは焼くあめふ向や七葉卷

路通 蝶羽 自笑 龜世 知足

時雨

于烟小入日傑つーろははく

東山

とよ付ぬあはれ水乃生るは
秋乃と衣よ〜ぬに若あり物時取
さ〜めき物よもた〜ぬ志くもさ
未ぬ人を志くもさうらふ志くもさ

知足 木雞 宗信 野吟

あはれとよ付ぬあはれ水乃生るは
秋乃と衣よ〜ぬに若あり物時取
さ〜めき物よもた〜ぬ志くもさ
未ぬ人を志くもさうらふ志くもさ

あはれ

あはれとよ付ぬあはれ水乃生るは
秋乃と衣よ〜ぬに若あり物時取
さ〜めき物よもた〜ぬ志くもさ
未ぬ人を志くもさうらふ志くもさ

かじりしを男とせりし一色
傘侍やし宵をさくら色文志ら花
雨伯

水仙花

あつちの歌を味方ふ水仙花
さし列
さし仙の能合ハナハ一福武者
蝶羽

茶の巻

上巻

茶の巻や浪広れとあハねとら
素堂
茶の巻や徑りけとら星月夜
龜世
茶の巻のりけとらや庭は唯折り
因友

巻

高海やさる流の門を折り
戈誓
海をよなまをおかきむらぬ
尼智月
ねハ音ぬく色をいつれ炭乃音
ハ菊
あけわのしきを耕を蹄
蝶羽
蠅出らと尾さる舞ふ陸の跡
風水

氷

江藤子法や氷れ下もみち
ツギ氷下
あま孝なるそらよ厚き氷るれ
龜世
池の魚あつしにほてぬ氷るれ
知足

雜冬

一丁のひも二す糸もよもひて冬は梅
 其の本より花の香散る此小春の柳
 せめて十夜何おおハ九十九夜
 大酒や三日五日も飲まぬは
 本枯よお祝しとらお寺の
 末のしもろいほりぬ柳外
 若もかろして柳やかりききれぬ
 角はくむ哉は此牛のききぬ
 十ヲの指はくし信するそよの柳
 ちハいん綴ハ切まて大根引

扶藪亭
 光彦
 蝶羽
 昨丁
 一
 業
 龜井
 和子
 紀之
 辛巳

十六

丸合羽さうりてまきとらるる
 けのちやち跡さして寝る湯婆式
 火加減の耳垣を喰火燧くぬ
 そよ菊もちらうのれ梅の名あは
 ちう系よまおかく杖や橋の不二
 富士とく川さうらからまよはぬけ
 籠はくちま田の管や世中

知足
 寸伽
 白雪
 秋風
 その
 如白
 柴

柴草

代はれ男さくくも吉野さす丸
 うさたりのよおもほくはるう
 赤今ハたうめれ老もたせさて

ふらふらうきても昔のなつしき
まじふらうきても昔のなつしき
うらふらうきても昔のなつしき
物もれえのうらふらうきても
まじふらうきても昔のなつしき
作湯の中にある物もれえ
いまもこのうらふらうきても
むらうきても昔のなつしき
あまうきても昔のなつしき

古郷や海の花はなほとくはなほ
はなほとくはなほとくはなほ

芭蕉
知足

年々もくもく太鼓はなほとくはなほ
うらふらうきても昔のなつしき
はなほとくはなほとくはなほ

如柳
蝶羽
琴風

春之部 後白

立春

代々もくもく太鼓はなほとくはなほ
うらふらうきても昔のなつしき
はなほとくはなほとくはなほ
湖のうらふらうきても昔のなつしき

露雪
冠里
南函
露江
戈磨

神鷄のあしとくやきあはる
蓬萊乃浪あしせん極乃殻
冥國ハハ跡かほする神日邪
つらまよま極の棋子精まら
霊まかす深もあふふ夜始
神なるを盤のまき細享ま

舎羅
如風
雨亭
知足
固友
素堂

梅

梅の香よ碎るきかよの雀うれ
梅の香よ妻くこころや水三更
祢是くくる声吹ななき梅乃風
竹の戸よ釣瓶の魚や梅の花

知足
柳水
和子
長父

十八

麴屋よとけり客何り梅の香
釈迦ハやま梅ハ導ノ鼻くくら
かろくハ寐一わくもて梅の花
梅の香やこかーちうもなるは
八月はゆけをばさ吹梅の香
這梅れ妙ふ新るさ月を吹く如

泚泉
周東
教員
柳血
江苦
野地

聖廟奉納三句

松梅の庭や文武れ右ひくく
ふ梅や万燈さりと松の中
けまを合う神乃松れくれ

知足
龜世
蝶羽

鶯

巻くくく鶯の牙とむつうしに
うくひもとを命や新れ千大根
うくひもとや子を愛れあやう
鶯やむうハ寺うあのみあり
今指を掌撰らぬ新撰のれ

下野 卷耳
寸馬

菊河
蝶羽
露子

閑ふれるをめてひぬく入ると又
里ありうくく一舟中に山林は
長らんとをきつやけ館のまへ
共乃りつら歌とくうぬはぬまうれ

露川

十九

凍解

凍解や去年のみ糸れ新寛
袴の書きき解て八十歳の徑ふ那

一海
寅三

柳

柳葉くあしに猫を物夜に
新又片くま砂あまきうま柳は
そよめくやあつてこれ風物柳
取風をくくくの柳の形
るくくその脊くのする柳うぬ
取取のこはうよ志のふ柳うぬ

大因
僧 魯九

知是
はく
びん女
紫負

猫戀 はこゑ

鞠とれてまゑと猫の形来なり
壁の穴取つ鳴つ浜これま
糸かけを扱つ越えははこゑ
はこゑと申ふとあり身れはこゑ

沾竹
氷下
白子
全羅

陽を

布袋まゝに流す

仕舞うりら陽をうかいをりし
燐ぬれと陽をともぬ塩を
陽を乃中より血月あり田より解

秋風
嬉斗
東藤

御月

里かきいらいりあやおほる月
晚待つ御乃ふほよ垣根うれ

蝶羽妻
蝶羽

蝸廬亭上のぼりて

星崎の御や低り亭れ上

越人

出替 善女入

出のハアとの寝るに抱えうとおと
おかりりや水ききとの并々車
善女入やくふつきらひてはほふ

團友
蝶羽
柳唯

紙鷲 雪之雀

春をくくくも春や切けいれり
美草よらんし消くくま雀哉
以らして上あう方や舞や雀

柳笑
醉素
落川

上巳

万葉れ姿ゆりや帝離
くくく糸して津門通る名跡合
二月月の光やほてりれくれ
沖の石目ふあくくは影さうくれ
鯉をきく伏見の桃又のほくハ

十
棧石
農石
加賀
空
鯉
亀世

柳咲て治りくくくす系ふふ

治由

花

くはハ和靖

あまはあまのまはるれ

初花やくくくくくくく麻の角

高翔

知是亭の初花を詠めやうて

えあまやくくくく男と花の浪

祖月

おあーく

沙妻令れ外十年やま乃山

三
一貫

老の山詔

ゆらとさき

も雲くくくんとととと雲の岫
いはれれてまよとさかむ言れ自
見もとのあうはの義れとくもれ
懐く経てゆらもももえんうあ
る資へまといめくおとれ花又死
さし流中志かろくおととと老い
まろく吞てくもも小合まもろり

スガ川 藤野
紫
辰田
三ノ川
蝶羽
亀世

櫻

獲おはまよく此真のさくく
咲やいら麻遊山猫脚のさくく
系操中や望田の網さハま
あさくく世をさく山れ形脚式
けくく中也後まもる親仁式
明河のく種又咲とくけさくく
まろくくハ系屋くま湯寺又操式
山さくくく表具くくくかすくく
やまけくくくく外ハ町屋式

下野 戈磨
里杜
檜然
馬負
申世
業
知
東推

ふさふさしと海ちりり
いふとありひ合をて

大勢れ月小吞ましうらけくうま
川裾巾散ハおほえてふけえら

秋
白子
柳糸

奉納 歌仙

芭蕉桃青

笠寺やこしぬ 嵐も春乃五
旅森を起そとれの後 接
月のう消けく々に旅子啼て
秀句かりひる言 瀬さくりり

知足
如風
重辰

千
九四

し茶をわき付ぬるゑく 毎れ暮
春久 かしきる 庭の錦 木
ウ 急のあられかさかう 伏てはつ又ツ
むくく 土乃 焦り 市 系
簾竿又 蕪をほくきて 風の音
下 郊の 祖 足しと 女もむ 家
さぬく けまき 振神の 烏帽子 志て
うらうらとを 笛く 吹 妙しきり
曇るる 帯と 夷よんを みる 秋の月
秀るよふ ちれり 菱 鏡の 像
白 絹又 蕪と 志の 小を 織こ 免て
院の 曹子 子 薰を とし

安信
自笑
業言
執筆
足
風
笑
信
辰
言
風
足

廊を双六うちにあのひより
 火を消教の帰き 辰
名 名をさあしむい見てのり
 一二の船を汐子ゆきす
 系推しま砂の馬めと衣なり
 刀をぬきそしたぬさお一切
 大年の宿れさか火新落く
 居職まなうくけるぬ入
 某の戸は乳を吞不のふとて
 りしははきししは千時の巻
 山はまそ何やら床し高公
 管おりけあぬま此体しむ

辰 風 言 笑 信 辰 風 辰 笑 言 辰 信

姉妹宮の細免と月をうて
 名を信音と付し白菊
 おりひま水女儀のみに投入ん
 杖らきぬとて扇引さき
 妙音のうたれ服をくら拂ひ
 音音を歌く八重のねとて
 舌整尾張のふりれらて
 暖しわさるささくのほほ乃

信 言 風 豆 笑 辰 豆 信

知是利掛下卷

芭蕉

杜若のつれよぬ夜のおりひあり
き積のちよぬるぬかひれ来
二つしつと坐する鳥夕とつぎこ
かゝるさふ神をいれし名不記
任訓て月待かとのうら侍ひ
それとてうり乃秋の風言
控ひて妻呼兼又身ぬさき
念力出たをともこふ志こころ
道神もこの杉又一唱志あつて

知足
桐葉
叩端
業言
自笑
如風
安信
重辰

十
九六

昔者此雲つり習を投はむ
かゝ杉を若く下敷のうらて
出たかこころよ八下ゆ
赤透は體かたつ口つ出ぬる
子とありし親の月はうらり
おそれの奴とぬるよおれ悔し
楮あはは楮あかたれてから
るるもゆふ首とら女をりあて
新しめぬぬ助を去楮まの
名
遊し後冊つきて放ちや
と楮あてを背負はくさふ人
ととれとてあつておまひく

蕉
足
兼
端
辰
足
凡
葉
言
端
蕉
信

又日の風はさるのこや
葉子葉も本かられてはては
もるるの亦面をのるもるる

芭蕉行跡此より

夏夏よあま後ゆくと又三日
のまゆりてくやを君れ卯のま

ありとくくすたらしの海よ
のありて真珠産れぬし
たいせせしはあまのま

才こまのくおまぬぬははは
のまの川を和えて之をくか
十三段海を度うはまして

かくをよかたぬ

知是

川奈や片飛くけし燕まくら
ゆさるる跡を結のみし夜
静れ松をたわよ飛ぬけし
家乃くくはあま後ゆくと
を結て雲車の新歩言れ月
稲を仕直して志けき稲事
い川中これおまに堤は不ぬ

如泉 全 露 全 足 全

お櫻をまきてあらましく買方ホ
一年も流るる妻のひより啼
中々煙をきりし乃愛
とくくしと歌の刺れ波の吉
かふ白くし出くぬ兼房
精進よ名代立ふ若の宴
きりし車を今又賞きし
飛翫りに女ひてりや江戸此町
運ふ糸産よくするお響
海産くあつて此月足寺
油くもあて蘭よ吹きん
名麻支よあはいやさくたん

泉 全 全 川 全 全 全 全 泉 全 全 泉 全 全 泉 全 泉 全

千九八

荏々しきと宗祇の質はあふれ
白くふまきまふ上のそふふ
あふりくや鶴の青あはれそき
あふ様やあつきまぬ鶴はあ

浴 春人
大垣 荊口
蝶羽
米沢 竹友

郭公

けしきと宗祇の質はあふれ
郭と系な酒さくまぬ
愛のまろくもあつたに
あよるあつてあしけくま
あふとあはれあふのそきや郭公
子紀何しのあつりよあふる

伊丹 青人
之白
壽 百丸
イロ 古道
デハ 芦本
童行

杜鵑啼き渡る江の九折の那
わきまきこき口濡さるるなるり
一声ハききよる包めほくは
山法師之つらひくはちよん
身ぬさく猿さるる子奴
けとと海きうあよむとま
下野 父全
淵泉 寔流 知足 蝶羽 龜世

けとと海きうあよむとま

多きも竿や折るぬき
ほくまきとほくかき
多ふふきき名ハ海ともかき
民権の目遣もいつはほくまき
芭蕉 来山 昨木 露若

牡丹

ほくけつに第ふてかる牡丹
奈又碎と振してるをぬ牡丹
まくけとハ志加ヌ乃於の牡丹
路通 知足 團友

牡丹 八つて

二度も歩沃わとてたすかまら
る小市かきらるるふき人もなり
くさるる行てけしひぬる明寺
弱下結よまらくまらりかき
秋津例ハ又よ不きりかき
三平風 素堂 不角 養民 全暇

立傘の傍に歩むのまはこころ
今なきは返葉微影のん杜より
隠るま家の涼川ぬく白雲を
如舟 雲歩 知足

箒

竹の子は裸よあはれハ誰ゆくと
竹れ子や夕字乃世に臨みし
竹乃子の一よおともあれと
竹の子を竹よかれと竹の垣
湖十 来山

端平

事福ものちりり
きまも
沽竹

おきてー 糍 活よふい
志くろ尾の毛をくし
陰を切敷やあやめれ
子なきやぬぬり懺又子持
岩花や朝のあやめを
曙の色をさけらるのほろり
非 平 不 己 卦 翠
非 亮 秋 子 中 戸

五月雨

五月雨やとまをふむま
五月雨や魚も白濁き
五月雨や山もくまてな
泉流 和子 蝶羽

水草花

花咲て紅くききまのうきに浮く
泥毒や花うきまれば後へ水
鯉魚にて岸のうき矢にたり
知足 蝶羽 子女

百合草

五重のひつりうき花百合草
姫百合草や小町もむし後口級
娘ゆりうき中々うき花の浦に
あさうき子も桂遊くやゆり花
百里 律哥 龜世 金風

水鶏

氏雲はほけしと和く水鶏
ぬくこの山もくつれて水鶏
荷兮 其香

蚊柱

蚊柱や角ふきとくもきひら
蚊柱も古流ふ時あり夕あり
蚊柱よりあさうきり鼻のせ
蚊柱ハ夕うは柳のふくうの柳
好永 魚九 鬼好 釣壺

神茄子

初あすや腮乃次のいそがしく
玉の流や是も幽乃初あすひ
甚 松着
泥燕

蓮

阿の蓮の初くふや臭れ例
水晶の山さるこきてやととて乃夜
立流されぬ凡又蓮の初あすひ
如風 善見 自笑

題狂言

よむ水此芙蓉又初 鬼の魚
山扉

蟬

山楳や小紋さるしきさす衣
山楳や袴のをまこれかす
夏まきのちまきこて楳れ
獨ト 蝶羽 嬉斗

暑

暑をも四くくしあまきこる羅漢丸身
もく尻と人のりよるまきあつさ火
麻よつろくあまきこるあつさ火
鬼鰲蝶の圍よりらまけあつさ
山石ひこれ楳はめくるあつさ火
和子 鮫走 東行 下野 短 暑 船

納涼

子を寝せて涼しくも有るに在
涼しさを夢て又せたるも車
涼しさをみよもやける帆うけ
極楽の風やお寺の夕さそそ
於此
木田
知足
醉素

名所之夏

星崎 夜寒里
履美里 上野

涼まゝうら星崎とやうぬ何れもや
星崎のまき田よりや飯のくれ
星崎乃ともうとれもくさう那
うらむもやゆふくの星はぬ名又式
惟然
湖十
暮松
釣壺

涼風やうらむをれ里の吹かまり
縁衣の二履美の里もぬる履うぬ
一軒祇さるの里やちとくさす
夕鳥や上野をぬる油筒
蝶羽
十鶴
釣壺
霏之

行脚北より

橋の小橋々橋もまき田々那
勢田れをまき田よりまき田
涼むる羽のまき田帆のくる星美
全
全
知足

知足亭より

林藤ともおほりまき田をれ履美より
全
全
知足

隻之舞文近きくもたのりて

俳諧種之部

鳴海眺皇

芭蕉

しんが秋や海もま田此一みより
系りしるの口ともしり 月
草床旁ちのくくく葉を致て
屋せくくみ 葎乃乃行まきくく
蛤のうくぬくくくくくく砂子
望めくくあけておまきくく

寄仙育答

重辰
如足
如風
安信
自笑

十

成五

賀新宅

芭蕉

よさやあや雀よらうくくあああ
蒜よくくあうり 野々果前) 萱
投波を並の縁袴をかきめ
月呂焼よ秋月乃あまの
枚垣のわちうくくすくく
くくくくくくくくくく

如足
安信
芭蕉
如足
安信

種之部 後白

初秋

笹竹の雀秋くくあああ

秋

是をぬあれ松尾の秋とくあ
和秋や等あを啼るく草乃而

セ夕

土忌や赤の字さやうん天川
もくも極の一節ぬさや星あ
織女れぬ入やよめりや月あ
ちよつとつたまのほりりや星近
おうけよ女のあやほく近
かー合れ蒲團をまうちの雲
某豊出を星さくやう近あある
んれさくれんもや川

十六 三帷

露霈

木内

金士

越 哥 東白

紀之

イセ 村女

八菊

子 十六

河尾や援の音あかー近
セ夕や糸いろくの竹乃毛
ニワ殺や江夕の死れ流ひ浪

龜世

一温

治竹

一葉

角文字ハ桐の落くるニ糸糸
とる秋のそりきハこゆるニ糸糸
桐の糸やつくく桶の糸け
相いまるんおぬれ合あう

其泉

歌女

美雀

山

生身魂

本るあく

このちや椿や生るあく是れ袖の糸

一銚

死くして生て 霧のさへ 萩の葉

天正 木因

玉糸

蓮池や折く其まら玉まらり
洞室乃ふい魂棚やゆき方
玉糸はしむ事自然なる
うけても煙火鳴るは乃乃
おとし女隔ぬあや玉はらり
親をおりよ夜の山は月乃々

芭蕉 上誰 亀世 蝶羽 丸足 七磨

粟

十 廿七

風よ名のきこものよ西の上

惟然

青瓢

卯秋中一

けしよ捨て

夕のほや秋はつらくはぬくは
福はくこや起こころはたま
ぬくぬく 茅屋おさゆる嵐

芭蕉 季巳 龜世

朝良

本槿

朝良や白髪もくえきもさる
せうらり又つてくき本槿
一ひゆり朝良とちつたたり
朝良の毛や綱戸乃くおる

日守 知文 團交 伯免

花野 女郎花

惜うぬ風ハまゆきこきん
そま〜や風ま〜る〜る花
秋風のあそ〜りてゆ〜る
り〜る〜る〜る〜る
角〜と〜と〜と〜と
松風の里よ汐くめめ島花

泥

志

世

海

波口

露

静々や冷々書々掌々花の色

白支

千 廿八

寶永

お月夜造りの時

きぬ〜や〜は〜ら〜ひ〜ハ大各
きぬ〜ハ似て似ぬものささる露

風水

之白

虫

虫よ〜啼〜て因果うはきるな〜
ぬけ〜〜〜〜〜〜〜
菘虫れ啼〜て枯木の風晴〜ぬ

乙別

木雞

洞泉

鹿

元山の松をえをり麻の聲

知足

をのりまれば枯れ跡に追ひの男も麻糸
延あう乾腸より細く麻の糸
棹麻糸声う乾くけりまふあり
育園や質うりかれて麻の声
をちうく流る初めの志がふ麻

野分

草や落雪ふふ今初めつたう
西風ひよりり雪ふを初めあり
庭の面もつるうりふき雪ふ
吹おしや母ふれあはたわく

千 廿九

鷗白

魯六

蝶羽

麦秀

我笑

柴友

素堂

之白

成之

間引菜

る引菜のち初提さくふ月と初
る引菜やほふとおりふまふ立

知足

一邑

菌

精めらり菌ひとつを鬼乃首
育のぬ松と舞うてまの子うれ
うけおや菌なうを教殊はまき

夕全

魚世

上誰

礎

うきうき後の冥寺地を礎哉

蝶羽

よたよけれりりれよある礎を
礎を程くそよけき奠てる

辰田
園友

鶏頭花

鶏頭やみ綿緋の裏は居
夕暮よ何をちりらん鶏頭を

林鳳
魚世
安信

月

裏緒ハ石知らん男の大か
いろくの枕やあらん秋は月

不變
加賀
北枝
洛
伯流

千

四十

寝ておろし是てもれり旅の月
蕪鉄も月ハゆくれと薄るれ

鉄蟬
素堂

名月

名月やいまこ増賀の裸了終
秋そよ中を乃次六のほ経
名月よまゝハ通るまの袂やら
名月此湯ふやあも自在行
名月や照も星をともあれとの
今日の月いてや小町う袂よハ
明月此経唱りては名月あふ

立雨
言水
光茂
秋色
柳舟
其不
嘯水
正次

白砂又ひくとく今見れり今見れ月
名月や今宵一夜の秋の晴
香屋の日記はあやうん月んか
名月や物未勝て肉又居た
名月やはめてはる日を將まん
名月の窓やワラの梅の花

八幡や

名月此林藤の松やおとこやま

十三夜

月やちの袖ハ本の義乃十三夜
葉も本衣太の玉婦りよはれ月
酒盡て臂のそくさやほの月

無天

露因

水

泉流

知足

戈磨

蝶羽

重春

全暇

長父

子

甲

菊

白菊や昔の菊の十一夜一福あり
清香をめぐらせうめ此菊の風
白菊や菊は松ろくはなけれど
中松より代を流るる菊は酒
松のひよふ代をあらうる菊は
白菊は晴るは後世の秘入る
白菊は代ははるきくみり
大人は流あり菊は酒を
濡るハ山依の菊の自然くれ
門あけくもる菊のよるひ

由平
自入

之白

蝶羽

十律

聖母

長

長

世

醉素

大椿

破去際やそよよとくすくす菊は香

文来

老菊

白髪よみなりしをけしめれ小むらさ

山扉

深川に堂よりみの中よ

十六夜の月とらんたるやせ踊る菊

芭蕉

新綿

新綿や浪まぬ代のもり乃さる

晚山

新綿よみなりしをけしめれ小むらさ

泥燕

新綿よみなりしをけしめれ小むらさ

林凰

子 四十一

秋暮

夕暮はいつもあれる秋の海

園友

馬牛の脊もはらうとれ秋は暮

松苗

何うさ話ももええ秋の風

初候

樓閣乃もよ草摺たむ秋の風

八菊

癖とくも常なき秋の雨うれ

横船

長夜

長秋や蜩の声も長恨一可

其角

音園やあられ氣まよ鳴海写

其角

と世に或老人は西の杖をやらせめ
終に假説るあはれを身白髪に
かくとも書物に—をせりるを
反古の中よりけり—か—
かろり—そのまの—に記—
侍らるる

琴引ふる—の—
折提る道—の—
酒—の—
ぬけ神るちくの—
同

子 四十三

とれくよ年を

猿の少神を 深に猿引 露荷

桜ハあみ木株を山里

約する此後—入るる— 枕 其角

お母く—の

うき秋を—の— 同

其角—の—

馬去—より—

樹ハ秋—野をこめん猿れつと 露治 其角

本枯乃吹切 後ぬめりれ
写子多留土をえん汁塩足坂
嵐雪
秋風

送氏市布

萩うきぬ所一紙布部すまふ
家名を鼻ひらぬのままくら
素月ハ粒名はこころしくれ
橋まろハ流まろハけりことおのま
妻時取をそひけりけりさくら
朝毎れうこやえまよまのま
後て送らゆらん時ふれ
時取くに福借まよの度
李白
文麟
李下
濁子
仙化
ちり
宗波
露蓬
曹生

笈銘

蝶羽

世を面白く海澄みかられひとつれ笈を友と
身の動く所を訳し杖のそへ海を友と名とん
其廣き武義みれおる古郷のやに通るけぬれ
俺一これとしてふつ物持おまの笈さーおら
かろけの笈一とまろくそこ笈の笈流又
日と忘るるる土丹生の笈えうちなるあつ
星出ののこ又子まの笈を友てかくしる
亡父わふうー感一篠りこ道とよの笈
入てぬるとも呼續の〜〜〜

一冊おせんしをかきけしにこそせるよふく夏
其心をもむふくく写海のひらふのひびき
よまうりけりり予其声のすこりぬるに
歌よ又よ友ちこりの声ききき流波ふしと
つきぬら乃まなまぬまにぬるのまはも
なつろしれん其のあつ許よりして豊田の
相まうかふ世しよまの歌波の春ふがむん
とていにおもひしよ自負ひし葉おを
れは先の履もも消たんほれあめにもせし
いのちもく出たしよ其浦風ふよそり世と
みしう記すの下浪しにぬりぬけきもやるる
より真やしよなましせめく其付はけなれ

えまくはしし相まの巻も世のせりなれハ
かくおもふよりしよのかりてこひせれとせ
の流乃くこえいふしよゆんやまもしよ
秋ふもあつとれましよまもあつふもせ
なしよひしよままのふ月五は秋も待とぬ
ましと散りてま流しよまおこせしりいかに
恋の玉も管媽しよ此記念となりしよあつ許は
不指しにりり其形はさぬしよ婢女の玉松留ふ
似くおないさもまのねなれしよ藤人のユミ
つえしよく流しよ塗りこめしよに令泥の
のこはやふおむしよけしよまもまうけの
あつなましかふましよましよましよましよ

小菴子とほけしハ負ふよふよりとやせし
むし好まありきたり申ふらうぬ屋よりきり
おしとくおほゆまけはのぬとちおまのく
とくかし一ぬくひ翁の文臺ふはくちか
公地一其の真とあふふさうれハも公と
のしと終し一終らぬ

笈言古極
袖物不壞
獨歩自負
坐懸肱噓
滑稽之頓

極本書箱
事約用詳
客路友侶
卧枕觀康
詞華餘光

千 四十六

屑吐之審
四時佳景
一世消息
其人已逝
負篋終腐

言實得薊
身心洋々
風月彷徨
爾笈爰昌
秀喙無亡

享和三年癸亥九月吉日

浪花書肆

奈良屋長兵衛

皇都書肆

井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛



